

ワイマール期における教員養成と新教育運動

—アルトナ教育アカデミーを中心として—

渡 邊 隆 信

1. はじめに

現代ドイツを代表する教育史家のひとりであるシュミット (Schmitt, Hanno) は、ワイマール期の学校改革の実態解明に関する1998年の論文のなかで、新教育に関連した学校や教育家のネットワークの全体像を図式化している^{*1}。それによれば、新教育学校と新教育家のネットワークは、人々を介したものと、各種メディアを介したものと2種類に大別される。人々を介したネットワークを構成するものとして、教師の学校異動・地位異動、学校見学、教育団体、大会・会議、講演会などがあげられる。また、各種メディアを介したネットワークを構成するものとして、学校の出版物、地域の教員雑誌、日刊紙・週刊誌、全国的な教育雑誌、便覧・年報・単著・双書、文献交換・学校放送・ラジオ放送などがある。

新教育の個別的な思想や実践を研究対象にするのではなく、それらが相互に結びつくことによって生じた新教育「運動」に注目しようとするとき^{*2}、シュミットが図式化したネットワークの整理は大いに参考になる。しかしながら、シュミットの図式化に書き加えるべき要素はないだろうか。教員養成機関もまた重要な新教育のネットワークの構成要素として追加できるのではないか、というのが筆者の仮説である。新教育を直接・間接に経験した者たちが教員養成に携わることによって、新教育の知を次世代の教師たちに伝達していったのではないか。つまり、教員養成機関とは新教育の知の結集と伝達のトポスであると同時に、新教育実践家の供給源として機能していたのではないか。そうであるとすれば、教員養成機関の中身を具体的に見ていくことで、新教育の知はどのようにして広まったのか、新教育はどのようにして「運動」となりえたのか、という問いへの一つの答えを提供できるのではないかと思われる。

以上の問題意識から、本稿では、ワイマール期の代表的な教員養成機関である「教育アカデミー」(Pädagogische Akademie) を取り上げ、新教育との関

係性をさぐることにする。その際、両者の関係性を測定する視点として、人事構成の次元、カリキュラムの次元、日常生活の次元など、いくつかの層を想定することができよう。教員養成機関と新教育との関係性を解明するためには、これらの層を重ね合わせて総合的に分析する必要がある。しかし本稿では、紙幅の関係から、さしあたり人事構成の次元に限定せざるをえないことをお断りしておく。

以下、考察の手順として、まずワイマール期における国民学校の教員養成制度改革に触れながら、プロイセンの教育アカデミーの概要について整理する。次に、教育アカデミーの創設を主導したプロイセン文部大臣ベッカー（Becker, Carl-Heinrich）と新教育との関わりについて検討し、続いて、教育アカデミーの人事構成について、当時のアカデミズム教育学の中心に位置していたノール（Nohl, Herman）とそのクライスを中心に考察する。最後に、ノールのもっとも信頼する弟子であり、後に新教育連盟ドイツ支部の初代会長にもなるヴェーニガー（Weniger, Erich）が学長を勤めていたことから、教育アカデミーのなかでも新教育とのつながりが深いことが予想されるアルトナ教育アカデミーに焦点をしばって、その設立と人事構成の特色を明らかにしたい。

II. ワイマール期における国民学校教員養成と教育アカデミー

1919年8月14日に公布されたワイマール共和国憲法143条第2項では、「教員養成は、高等教育について一般に適用される諸原則に従い、全ドイツについてこれを統一的に規定するものとする」と定められた。これにより、国民学校教員は従来の教員ゼミナールではなく、大学（高等教育機関）において養成されるべきこととなった。しかし、具体的にどのような形で国民学校教員養成を大学に組み入れるかについては多様な意見が存在した。1920年の「全国学校会議」第9分科会で繰り広げられた教員養成をめぐる議論は、その一例である^{*3}。

国民学校教員もまた高等教育機関において養成すべきであるという憲法上の要請—そしてこれはドイツ最大の教員組織であるドイツ教員連盟の宿願でもあった—は、ベルサイユ条約後の財政的理由から共和国政府が教員養成改革のための費用負担をしないという決定を下したことにより、実現の道を断たれることになった。全国レベルの大綱も定められず、教員養成制度の再編

は諸邦の自由裁量にまかされた。1926年5月の共和国裁判所の決定の後には、憲法の条文も拘束力を失った。その結果、ワイマール期後半には、従来の教員ゼミナールから大学における3年間（6学期）の養成まで、統一性を欠いた多様な国民学校教員の養形成態が併存することとなった。バイエルン、ヴュルテンベルクが教員ゼミナール（6年）、テューリンゲン、ザクセン、ハンブルク、ブラウンシュヴァイクが大学（3年）、ヘッセンが教育学インスティテュート（2年）。プロイセンが教育アカデミー（2年）、といった具合である*4。

国民学校教員養成について全ドイツで統一的基準を作るという構想が挫折したときに、ドイツ最大の邦プロイセンがどうするかが大きな意味をもった。ドイツ教員養成の歴史のなかでプロイセンの決定はしばしば指導的な役割を演じてきたからである。プロイセンには、旧来のゼミナールを継続するという選択の可能性も残されていた。そうした状況で決定的な役割を果たしたのがプロイセン文部大臣ベッカーである。勇気とともに権力と能力をそなえていた彼は、ドイツ教員養成の刷新に迫る危機をはっきりと認識し、逆戻りするような企てを阻止し、先に進む道、つまり教育アカデミーにおける国民学校教員の養成という道を開いた*5。

しかしながら、ベッカーはなぜ大学や工科大学に国民学校教員養成を統合せず、教育アカデミーという独自の教育施設を設けたのか。ドイツ教員組合の主張は、大学における養成であったし、実際に上述のハンブルク、ザクセン、チューリンゲンといった邦では、多かれ少なかれ徹底して実現された。クラフキ（Klafki, Wolfgang）によれば、ベッカーと文部省内外の彼の協力者たちにとって、本質的におそらく決定的な役割を演じたのは、次のような判断であった。すなわち、ほとんどの大学や工科大学は、これまで受け継がれてきた自己理解にしがっているがために、実践的要素を強くともないながら、つまり新教育の潮流に定位しながら、全体として教育学的に方向づけられた大学での勉強という、アカデミー概念の根底にある理念を実現する気もなければ、それを実現することもできないという判断である*6。教育学とその補助科学を養成の中核に位置づけ、教育の理論と実践の結合をはかることは、既存の大学や工科大学では不可能に近いということである。

教育アカデミーの法的基礎づけは、1925年7月20日公布の省令「プロイセンにおける国民学校教員養成の新規定」によってなされた。それによれば、

国民学校教員養成の目標は、「国民学校の必要と国民学校教員がその活動範囲において行うべき民衆教育活動の必要によってのみ規定されうる」*⁷。したがって、今後の国民学校教員には、「教育学的な訓練をうけていること、伝達すべき精神的、宗教的、道徳的、技術的ならびに芸術的陶冶価値に精通し、それらを郷土の民族性のなかに定着させることに習熟していること、そして明確な職業的信念を有していること」*⁸が要求される。

こうして1926年から30年のあいだに全部で15の教育アカデミーが設置された。教育アカデミーの主だった特徴は次の通りである。アビトゥアー取得を入学資格とする高等教育機関であるが、教育学博士などの学位授与の権利は持たない。2年制（4学期）の課程で、宗派別に分かれており（プロテスタント12、カトリック2、宗派混合1）、男子校のボンを除いて男女共学。学生数は1学年120から130人、教員は20人前後で、旧ギムナジウム教師、大学講師、教員ゼミナールの教師など多様。1933年5月に全国一律に国民学校教員養成機関が「教員養成大学」（Hochschule für Lehrerbildung）に改称されるまで存続し、戦後設立される「教育大学」（Pädagogische Hochschule）の「前身」と位置づけることもできる*⁹。

III. C. -H. ベッカーと新教育運動

先に述べたとおり、教育アカデミーの創設を主導したのはベッカーである。彼はハイデルベルク大学とボン大学でイスラム研究の講師・教授として活躍した後、1916年にプロイセン文部省の大学局に招かれた。1919年4月に文部大臣ヘーニシュ（Haenisch, Konrad）のもとで次官に昇格したのち、1921年4月から11月まで自ら文部大臣の任についた。その後ベーリッツ（Boelitz, Otto）に交代したが、1925年1月に再び文部大臣に返り咲いた。そして1930年1月にグリメ（Grimme, Adolf）に席を譲るまでの5年間、文部大臣の重責をになった。ベッカーは、ベーリッツの在任中も文部省の高等教育政策を牛耳っており、その意味で文部行政の継続性を保障するとともに、かなりの影響力を行使したとされる*¹⁰。

教育アカデミーと新教育運動の関係について考察するにあたって、教育アカデミーの生みの親とも言えるベッカーが新教育運動に対してどのようなスタンスをとっていたのかは、決してささいな問題ではないと思われる。はたしてベッカーは新教育運動にどのように関わった、あるいは関わらなかった

のだろうか。

ベッカーはすでに1920年の著作『教育への要請』のなかで、フィヒテを引き合いに出しながら、「新しい教育」(neue Erziehung)が「新しい心情」(neue Gesinnung)と新しい精神をともなった「新しい学校」(neue Schule)をもたらすと述べている^{*11}。アルトナ教育アカデミーとキール教育アカデミーで教鞭を執り、戦後、教育アカデミーの歴史的研究をおこなったキッテルによれば、ベッカーは自ら新教育運動に属してはいなかったが、新教育、とりわけ青年運動出身の若い教育者に期待していた。そして、新教育運動がドイツの文化的生活の刷新と確立にとって重大な意義を持ちうると確信していた。そのうえで新教育運動に対しては、国家の後援者という役割を自認していたという^{*12}。そうした彼にとって、「教育アカデミーの創設はおそらく、彼が当時の教育運動のためにおこないうるもっとも重要で最善のことであった」^{*13}。そして最初から、教育運動の代表者たちとの絶え間ない関係のなかで、教育アカデミーの計画はなされたとされる。その場合、キッテルにしたがえば、ベッカーは次のような見込みをもっていた。すなわち、「教育運動が全体として教育アカデミーのなかに、運動が歴史上効力を発揮するために欠かせない、精神的に正当で国家的に合法的な制度を見いだすであろう」ということ^{*14}。そして、「教育アカデミーは単に正しい理論においてだけでなく、また理性的な文化政策上の決定においてのみならず、まさしく生き生きとして運動のなかに根を下ろすことができるであろう。そして、そうした運動によって最初から教育アカデミーは現存する力強い精神の担い手となり、またひしめき合う精神による豊かな実りとなる」ということであった^{*15}。

ベッカーと新教育運動とのこうした結びつきは、教育アカデミーの創設期についての公的な理論的、文化政策的議論では、あまり表に現れることはない。しかし、この結びつきから、ベッカーは教育アカデミーの創設という彼の冒険への究極の勇気を得ていたとキッテルは述べている^{*16}。

IV. 教育アカデミーの人事構成とノール・クライス

教育アカデミーは1926年から30年までに全部で15校設置された。設置年ごとに三期に整理すると次のようになる。

第一期： 1926 ボン、エルビング、キール

1927 フランクフルト a. M.

第二期： 1929 ハノーファー、ドルトムント、ブレスラウ、
エアフルト

第三期： 1930 アルトナ、フランクフルト a. Oder、カッセル、
シュテットイン、コットブス、ボイテン、ハレ

ベッカーの息子で、マックス・プランク研究所の教育研究所の設立者であるヘルムート・ベッカー (Becker, Hellmut) によれば、「C. H. ベッカーは、青年運動の左右両派を自分の新しい教育思想のために味方に付け、青年運動を教育アカデミーのなかに統合しようとした。このことは最初の教育アカデミーへの招聘人事がはっきり示しているように、十分にうまくいった」^{*17}と述べている。こうして青年運動出身の天分豊かな若い教育者の一群が、新しい教員養成の活動に誘い込まれたというのである^{*18}。

青年運動と教育アカデミーの強い結びつきは、とりわけ第三期に見ることがができる。ベッカーは、1930年設立の7校には、1925年にクラット (Klatt, Fritz)、トゥルムラー (Trummler, Erich)、そしてライヒヴァイン (Reichwein, Adolf) らのグループから提起されていた青年運動の理念を導入しようとした^{*19}。

この第三期の7校のうち、アルトナ、フランクフルト a. Oder、ハレの3校は、ベッカーによって直接任命された初代学長によって率いられていた。アルトナのヴェーニガー、フランクフルト a. Oder のハーゼ (Haase, Otto)、ハレのフランケンベルガー (Frankenberger, Julius) がそれであり、いずれも青年運動ないしは新教育の学校と深いつながりを有していた。ヴェーニガーはチュービンゲン大学の学生時代に、決闘規約をもたず青年運動に近い立場をとる学生組合「ニカリア」(Nicaria) のメンバーとなり、1913年10月に「自由ドイツ青年」のホーアー・マイスナー大会に参加した経験をもっていた^{*20}。ハーゼは、青年時代にアルト・ワンダーフォーゲルならびにワンダーフォーゲル e. V. の会員であった。ゲッティンゲン大学を卒業した後は、リーツ (Lietz, Hermann) が創設したドイツ田園教育舎ハウビングダ校、トリューパー (Trüper, Johannes) が創設したイエナの治療教育のための教育舎等で教鞭を執っていた。またライヒヴァインの後任としてイエナ民衆大学の校長も務めた^{*21}。フランケンベルガーもまた、自由ドイツ青年ならびにゼラ・クライスのメンバーであると同時に、ゲヘーブ (Geheeb, Paul) とヴィネケン (Wyneken,

Gustav) によって創設されたヴィッカーズドルフ自由学校共同体で教師を務めていた^{*22}。

フリットナー (Flitner, Wilhelm) の回想によれば、ベッカーに対してこの3名の提案をおこなったのはフリットナーたちで、ヴェーニガーの人事はとりわけノールの提案によるものであった^{*23}。3名中2名(ヴェーニガーとフランケンベルガー) はノールの弟子であり、フリットナーもまたイエナ時代のノールの弟子であることを考え合わせると、教育アカデミーの人事に対してノールが少なからぬ影響力をもっていたことが推察される。

ノールは、1920年初めからゲッティンゲン大学において「教育学を中心とした実践哲学」員外教授として教授活動を開始し、1922年5月、新設された教育学講座の正教授に任命された^{*24}。当時は教育学が大学の一学科として「自律性」を獲得することが目指された時代であり、ノールはそのために大きく貢献した人物のひとりである。彼はゲッティンゲン大学の教育学ゼミナールを率いて数多くの弟子を育てた。彼が主査をつとめた博士号取得者の数は、1921年から1954年までのあいだに66名を数えた^{*25}。そして、彼らの研究業績のために『ゲッティンゲン教育学研究』(Göttinger Studien zur Pädagogik) を創刊し、博士論文の発表の場を形成した。こうした結果、1920年代半ばにはノール・クライスないしノール学派と呼ばれる集団が形成された。ノールがフィッシャー (Fischer, Aloys)、リット (Litt, Theodor)、シュプランガー (Spranger, Eduard) とならんで雑誌『教育』(1925年10月創刊) の編集者の一人になったときに、ノールのみならず彼の弟子たちの協力も期待されていた。同誌の編集長 (Schriftleiter) を務めたフリットナーによれば、当時リットとフィッシャーはまだ有名になっていなかった。シュプランガーは学派を作りたがらなかった。ノールだけがそれを明確におこなったのであり、当時とびぬけて大きな弟子たちのクライスを有していたのである^{*26}。

ノールの新教育運動との関わりについて言えば、彼もまた自由ドイツ青年のホーアー・マイスナー大会に駆けつけた青年の一人であった。イエナではゼラ・クライスを介して青年運動を経験するとともに、新教育運動の一つに数えられる民衆大学の実践にも関与していた。ゲッティンゲンに移ってから新教育に強い関心を示した。ベルリンの中央教育研究所のパラート (Pallat, Ludwig) とともに編んだ全5巻の大著『教育学ハンドブック』(1928-33) は、ワイマール期における新教育の多様な実践と理論を対象にしてい

た。その第1巻所収の諸論文を抜粋して公刊された主著『ドイツにおける教育運動とその理論』(1935)は、新教育をドイツ精神史のなかに理論的に位置づけることを通して、個々ばらばらの新教育の実践と理論に統一的な運動としての像を与えたものである^{*27}。また、新教育の理論的研究にとどまらず、自らの大学教育に新教育的な形態を導入しようとした。その代表的な実践として、彼は1929年に、ゲッティンゲンから西へ45kmの距離にあるヴェーザー川沿いの小村リップルツベルクの修道院跡に「田園寮」(Landheim)を開設し、しばしばそこでゼミナールの指導をおこなった^{*28}。田園寮という名称は、当時広まっていた学校田園寮運動(Schullandheimbewegung)を明らかに意識したものであった。この田園寮は教育学ゼミナールの関係者を中心に組織された「ゲッティンゲン教育学ゼミナール友の会」(Freunde des Göttinger Pädagogischen Seminars e. V.)^{*29}によって運営され、教育学ゼミナールを中核としたネットワークの形成も目指していた。

このように新教育の理論と実践に幅広く取り組んだノールのもとから巣立った弟子たちにとって、当時新しく開設されていた教育アカデミーは、格好の就職先であった。実際に、ヴェーニガーとフランケンベルガー以外にも、ノールの弟子たちの多くが教育アカデミーに教授ないしは講師として採用されている。ノールが主査を務めた博士号取得者は1921年から31年のあいだに21名いたが、そのうち6名(29%)が教育アカデミーに就職している。その氏名と赴任先等は以下の通りである。

氏名	学位取得	赴任先	職階	担当	在職期間
ヨエルデン (Joerden, R.)	1925	アルトナ フランクフルト a. M.	講師 非常勤講師	教育学 —	1931.4—1932.3 1932.4—1933.4
レーメンジック (Lehmensick, E.)	1926	キール	教授	心理学・教育学	1930.8—1933.4
ハーバー (Haber, G.)	1929	アルトナ	講師	実践教育学・算数	1930.4—1932.3
ガイスラー (Geißler, G.)	1929	ハレ	講師	教育学	1930.4—1932.3
メスター (Mester, L.)	1931	アルトナ フランクフルト a. M.	講師 非常勤講師	体操 —	1931.4—1932.3 1932.4—1933.3
ジーゲル (Siegel, E.)	1931	シュテットティン エルビング	講師 非常勤講師	理論的教育学 —	1931.4—1932.3 1932.4—1933.4

これ以外に、ノールが博士号取得の際の主査ではないが、ノールのもとで学問的指導を受けたり助手を務めていて、一般にノール・クライスに入れられる弟子たちのなかで、上述のヴェーニガーとフランケンベルガーのほかに、フリットナーとフルーク (Flug, Otto) がキール教育アカデミーに、ブロッホマン (Blochmann, Elisabeth) がハレ教育アカデミーに、それぞれ就職している。

V. アルトナ教育アカデミーの設立と人事構成

(1) アルトナ教育アカデミーの設立と開学式典

本節では、ヴェーニガーが学長を勤めていたアルトナ教育アカデミーに焦点をしばって、その設立と人事構成について明らかにしたい。ヴェーニガーは戦後、教育学ゼミナールにおけるノールの後任をまかされるとともに、1931年10月に新教育連盟のドイツ支部が創設されたときに初代会長に任命されることになる。そうした意味で、アルトナ教育アカデミーは新教育との関係性が他の教育アカデミーよりも明瞭に表れることが推察される。

アルトナは、エルベ川に面した港湾都市で、古くから水運を利用した商業活動によって発展してきた。人口は19世紀末の段階で10万人余りであった。けっして小さな規模ではないが、わずか数キロの距離のところに、ドイツ第二の大都市ハンブルクが控えているがために、その陰に隠れて歴史の表舞台に出てくることはあまりない。

シュレスヴィヒ・ホルシュタインにはすでにキールに教育アカデミーが設置されていた。同地域の2番目の教育アカデミーをどの街に建設するのか、候補地をめぐってフレンスブルクとアルトナのあいだで激しい綱引きがおこなわれた。最終的に1929年12月のプロイセン邦議会 (Landtag) の教授委員会で、アルトナに設置されることが決定した³⁰。さっそく同月10日に、アルトナ市とプロイセン文部省のあいだで、校舎建築費に関する契約が交わされている。当面は既存の建物「青年の家」(Haus der Jugend) を間借りするかたちで、教育をおこなうことになった。

1930年5月15日火曜日、アルトナ教育アカデミーの開学式典が市をあげて挙行された。式典の華やいだ模様については、同日付けで「アルトナー・ナーハリヒテン」、「ハンブルガー・アンツァイガー」、「ハンブルガー・フレムデンブラット」等の新聞に記事が掲載された。なかでも地元紙「アルトナー・

ナーハリヒテン」は第一面を大きく使って、式典の進行を詳細に報じた³¹。以下、同紙にしたがって式典の様態を再現してみたい。新しい教育アカデミーへの各方面からの期待をうかがうことができるであろう。

午前10時、クロップシュトック通りのクリスティアン教会（Christianskirche）にて祝典の礼拝が執り行われた。参加者は、アルトナ教育アカデミーの教員、アルトナ市参事会の構成員、プロイセン文部大臣グリメをはじめとする多数の来賓、アルトナ市のほとんどすべての教員たちであった。

礼拝終了後、長い行列をつくって本来の開学式典の催される「カイザーホーフ」（Kaiserhof）へ移動した。会場の大広間は、色とりどりの切り花とどっしりしたイチイの樹によって、なごやかななかにも威厳に満ちた雰囲気でも飾り付けられていた。背の高いオルガンの前には、3つの大旗がつるされていた。中央は黒・赤・金、左はプロイセンの黒白、右は赤地に白のアルトナ市の紋章のはいった旗であった。参加者1500人が案内にしたがって順序よく着席したのち、式典はキール合唱団と大学聖歌隊による合唱と、キール大学音楽同好会（Collegium Musicum）によるオーケストラ演奏とともに、おごそかに開幕した。

式典では最初に、文部大臣グリメが祝辞を披露した。彼は大都市アルトナに教育アカデミーをおくことに異論があったことにふれたあとで、同校が3つの意味で象徴的であることを期待を込めて述べた。第一は、アルトナ教育アカデミーが都市と農村を架橋するような国民学校教員を養成すること。第二は、エルベ川を越えて南のハノーファーの地域の青年たちにも教員養成をおこなうこと。第三は、教育アカデミーが最初の施設を「青年の家」に見いだしたこと、である。

続いて、アルトナ市長バウアー（Bauer）、ホルシュタイン司教モルトホルスト（Mordhorst, D.）、キール大学総長ヘーバー（Höber）、ハンブルク大学総長カッシーラー（Cassirer）、アルトナ教育ゼミナール校長ブロイカー（Breucker）、シュレスヴィヒ・ホルシュタインならびにアルトナ市の初等中等学校教員組代表フェスティンゲ（Festing）が祝辞を述べた。

合唱とオーケストラの演奏をはさんで、ヴェーニガーが演台にのぼり、7名の祝辞に返答するかたちで、それぞれの人物および組織に対して、アルトナ教育アカデミーの設立に協力してくれたことへのお礼と、今後のさらなる

連携と協力をお願いをおこなった。とりわけ彼が強調したのは、国民学校の教師たちとの団結であった。

「けれどももっとも強いのは、われわれと国民学校の教師たちとの団結です。教育アカデミーは、教師たちの大きな教育運動（*Erziehungsbewegung*）と自律運動（*Autonomiebewegung*）なしには存在しえないでしょう。教育アカデミーの任務は、国民学校教師たちのたゆまぬ自己教育活動の成果と学級での経験を、次の世代の教師に引き継ぐことです。そしてアカデミーのあらゆる理論は、それが絶えず国民学校の生き生きした実践から出発しないとすれば、不毛でありましょう。もちろんわれわれは次のことを十分に心得ています。アカデミーは、多くの点で違った形で自分たちの後継者の養成を思い描いていた教師たちから、もっと信頼を得る必要があります。しかし、教育アカデミーの活動が信頼に値し、教師たちの自己教育運動の大きな伝統を継続するものであるということが示されることが期待されているのです。」^{*32}

この発言は、ヴェーニガーが重視していた教育における理論と実践の循環的構造の把握と、その際の実践優位の理解^{*33}にしたがって、自らの教育アカデミーを実際に運営していこうとする意思表示であるとするのが可能であろう。

ヴェーニガーの挨拶ののち、ドイツ国歌の1番と3番を参加者全員が起立して合唱し、それによって2時間に及ぶ式典は終了した。午後には、トイフェル橋からブランケネーゼまで蒸気船「ハパク」(HaPag)による海上パレードがおこなわれた。

開学式典にノール、グリメラと一緒に式典に出席していたフリットナーの回想によると、「雰囲気はまるで教育改革の勝利を祝うかのごとく、よろこびに満ちあふれた (*übermutig froh*) ものであった」^{*34}という。前文部大臣ベッカーは式典に出席していないが、5月14日付けの書簡で、ヴェーニガーから贈られた講義便覧のお礼を述べるとともに、アルトナ教育アカデミーの開学を心から祝福している。そのうえで、同校の今後のあゆみとヴェーニガーの仕事ぶりを信頼しながら注目していきたいという期待を伝えている^{*35}。

(2)ヴェーニガーによる設立準備

先に見たとおり、1929年12月にアルトナに教育アカデミーが設置されることが最終決定されてから、翌年5月の開学までのあいだに、準備のための期間は半年しかなかった。そのあいだに施設の確保、教職員の採用、学生の入学手続き、カリキュラムの編成等が急ピッチでおこなわれた。ヴェーニガーは、1929年9月の段階ですでに学長就任を打診されていたようである。彼はその申し出を受け入れるべきか否かはまだ決めかねていたが、同時に新しい教育アカデミーの構想をひそかに練っていた。この時期にハンブルク大学のフリットナーに宛てて書いた書簡^{*36}は、そのことを明確に示しており非常に貴重である。ヴェーニガーは同書簡において、「アルトナの教育アカデミーを私が有益なたちで指揮することが想定しうるような条件」^{*37}としてまず次の9点を書き上げている。走り書きに近い私信であることもあり、文章は必ずしも読みやすくないが、そのまま訳出しておこう。

「1. 4年間のアカデミーの実験的性格

2. 1年間の訪問者禁止
3. 文部省によって例えば結ばれた約束や拘束を気にせずに、完全に自由に講師ポスト (Dozentenstellen) を任命できること
4. 講師 (Dozenten) は1年間、臨時任用され、その後初めて最終的に任命。それに加えて、最初の4年間は他のアカデミーとの講師の交換の可能性。仮に他のアカデミーとの共同作業が不可能であるということが明らかになったとしても、そうした共同作業はアカデミー全体にとって不利益にならないであろう。
5. アカデミーの教師陣、とりわけ教授学者のポストの新規定に関する全権、およびアカデミー学校教師 (Akademieschullehrer) を理論的活動に招き入れることと、アカデミー外のスタッフへの教授委託の授与に関する全権。
6. 市は、アカデミー学校 (Akademieschulen) のポストの一定数をアカデミーによって埋めるために初めから空けておくことと、さらに新助手あるいは新しい種類の教授法研究者のために半雇用の (mithalber Beschäftigung) ポストを一定数設けることに、同意しなければならないであろう。市はさらに、受け入れた教員については、

最初の共同作業を経験した後、業務がうまくいくようなかたちで異動がおこなわれることを、承認しなければならないであろう。少なくとも一校がまったく新たにアカデミーと同時に設立され確保されるならば、素晴らしいであろう。けれども、少なくとも視学官のポスト (Schulratstelle) とならんで、校長ポスト (Rektorstelle) の1つか2つを私どもによって占めることが必要であろう。

7. もちろん男女共学。初年度は50名のみか、最大でも75名。選抜はある特定の地方に結びつくのではなく、今一度若い世代のなかから最良の人材を得るよう試みる。
8. 建設計画等に決定的に関与すること。
9. 個人的な願望ではありますが、私が簡単に任命されるのではなく、正式に招聘されるという願望を、あなたが代弁してくださるようお願いいたします。あなたはきっと理由がおわかりですし、そうすることでひとつの伝統が作り出されねばならないでしょう。その他、キールとアルトナ、どちらがより大切か、いまだに思案が必要です。もちろん、すべてを準備することができるには、遅すぎない決断が望ましいでしょう。』^{*38}

さらにこの9点に追加すべき点として、ヴェーニガーは、カリキュラム上の自由、実習と創造的な合宿を組み込んだ新しい休暇規則に関する自由、そして試験を新しく作り上げることにに関する自由、の三つを要請している^{*39}。

プロイセン文部大臣ベッカーからの正式な学長の辞令は1929年10月29日付けで公布された^{*40}。俸給は年間12400ライヒマルクであった^{*41}。ヴェーニガーは辞令公布後の11月13日に、同じくノールの弟子であるハンブルク大学のゲーブハルト (Gebhardt, Jurius) に、学長を引き受けたことを連絡し、今後の協力依頼をおこなっている^{*42}。

(3) 教員人事の構想

アルトナに限らず、教員の人選は各教育アカデミーの学長に推薦権があり、その結果まとまりある教授団を形成することが可能であった。ヴェーニガーもまた自ら人事構想を練っており、1929年9月30日付けの先のフリットナー宛書簡で、以下のような具体的な構想を伝えている。

- ・教育学理論： さしあたりヴェーニガー 1人◎
- ・心理学： おそらくムヒョウ (Muchow, Martha)
ボンディ (Bondy) も考えられる (少なくとも社会的教育
学の講義委嘱を引き受けてほしい)
- ・言語教育と現代社会誌： クラット (Klatt) ◎
- ・宗教学： キッテル (Kittel) ◎
第2候補としてシャフト (Schafft)
第3候補としてフェルガー (Völger)
- ・実践教育学と宗教授業の実践： ヤナーシュ (Jannersch) ◎
- ・基礎学校教育学： ゲープハルト (何があっても断念できない)
- ・民俗学： トネゼン (Tonnesen) ◎
彼にその気があればライヒヴァイン (Reichwein)
- ・芸術授業： シュヴェンク (Schwenk) ◎
- ・作業教師： アカデミー学校の教師
- ・国語： おそらくノイベルト (Neubert, Waltraut)
- ・体育： メスター (Mester) ◎
あるいはプラレ (Pralle)
- ・音楽： シュレンゾーク (Schlensog) かヘッカー (Höcker)
- ・その他助手ポストでもあるアカデミー教師ポスト (Akademielehrerstelle)：
ハーバー (Haber) ◎
プレーフェ (Prove) ◎
ファルケ (Falke, Ludolf)
他2～3名

ヴェーニガーはその後も精力的に人事選考作業を進め、同年11月5日付けのノール宛書簡において、プレーフェ、キッテル、シュヴェンク、ヤナーシュについては、ベルリンで人事をある程度かためてきたことを報告している^{*43}。

上のリストのうち◎印がついている9名 (ヴェーニガー本人を含む) は、その後うまく採用することができ、アルトナ教育アカデミーで教鞭をとることになる者たちである。ヘッセ (Hesse, Alexander) によれば、1930年夏学期から1932年3月の冬学期終了までに、同校で教員として働いた者の数は14名であったので^{*44}、その半数以上は、ヴェーニガー自身の推薦によるものと推

察される。さらに興味深いことに、この9名について、ヘッセが整理した詳細な履歴等をもとに調べてみると、次の6名が何らかのかたちで、青年運動をふくむ新教育運動に関与していたことがわかる。

- ・ヴェーニガー 学長、教授（哲学、教育学）
学生時代より青年運動に参加
ホーエンロート同盟を通して民衆教育運動に関与
1931年設立の新教育連盟ドイツ支部の初代会長
- ・クラット 教授（社会教育学、成人教育）
学生時代より青年運動に参加
ホーエンロート同盟を通して民衆教育運動に関与
- ・キッテル 教授（宗教学）
学生時代より青年運動に参加
- ・ヤナーシュ 教授（実践教育学、社会教育学）
1908/09年、ホーエガイス田園教育舎の教師
1909-14、1920-30年、ゾリンク田園学舎の共同設立者、教師
1918-20年、ヴィッカーズドルフ自由学校共同体の教師
- ・メスター 講師（体育）
学生時代より青年運動に参加
- ・トネゼン 教授（民俗学、国境学）
ホーエンロート同盟を通して民衆教育運動に関与

この6名以外に、新教育運動に関わっていた人物でアルトナ教育アカデミーに在職した者として、音楽の講師ホフマン (Hoffmann, Hans) がいる。彼は、ハンブルクの新教育運動出身の革命的な若者のひとりヨエーデ (Jöde, Fritz) がベルリン・シャルロッテンベルクに開設した民族音楽学校において教鞭をとった経験をもち、音楽的青年運動「ケルンギルド」(Kerngilde) のメンバーでもあった⁴⁵。彼を合わせると、全教員14名中、半数の7名は、新教育運動に強い結びつきを有していたことになる。いまのところ管見の限りでは、ヴェーニガーが「新教育的」であることを人事選考の明確な条件にしていたということを裏付けるような資料は、見いだせていない。しかしながら、少なくともアルトナ教育アカデミーの人事構成を事後的に分析する限り

では、そこに新教育運動との強い結びつきを見いだすことは可能であろう。

VI. おわりに

本稿では、教員養成機関が新教育の知の結集と伝達のトポスであると同時に、新教育実践家の供給源として機能していたのではないかという仮説にもとづいて、ワイマール期の代表的な教員養成機関である教育アカデミーを取り上げて、新教育との関係性について考察してきた。その結果、少なくとも次の3つの点において、教育アカデミーと新教育との結びつきを確認することができた。

第一は、教育アカデミーの生みの親であるプロイセン文部大臣ベッカーが、新教育運動、とりわけ青年運動の出身者たちに期待をかけ、彼らとの絶え間ない交流のなかで、教育アカデミーの計画をたてていたことである。ベッカー自身は新教育運動の実践に直接関与することはなかったが、国家の後援者というスタンスで新教育運動を支援するとともに、そこから教育アカデミーを構想し具体化するための勇気と着想を得ていたのである。第二は、当時のアカデミズム教育学を代表する研究者で、新教育の理論と実践に幅広く取り組んだノールが、多くの弟子たちを新設の教育アカデミーに教員として送り込んでいたことである。われわれは、ノールが1921年から31年のあいだに主査を務めた博士号取得者の約3割が教育アカデミーに就職していることを、確認することができた。第三は、ノールのもっとも信頼する弟子であるヴェーニガーが学長を務めるアルトナ教育アカデミーに関しては、全教員の半数が青年運動あるいは新教育の学校実践を経験していたということである。しかもその大半は、教員の人事選考に際しての第一の推薦権をもつヴェーニガー自身が選出した人物であったことを明らかにすることができた。

以上のことから、少なくとも人事構成においては、教育アカデミーと新教育とは少なからず関係性を有していたと結論づけることができよう。ただし、「はじめに」で述べたように、これは両者の関係性を解明するためのひとつの視点からの考察にすぎない。教育アカデミーの実際のカリキュラムにおいて、「新教育的」なところはどこにあったのか。また教育アカデミーでの教員と学生の関係や日々の学生生活のなかで、「新教育的」な要素はどこに見いだせるのか。今回検討した人事構成の次元に、こうしたカリキュラムの次元や日常生活の次元を重ね合わせることで、教員養成と新教育運動との関係性を

より総合的かつ具体的に分析することができるであろう。稿を改めて考察したい。

-
- * 1 Schumitt, H. : Zur Realität der Schulreform in der Weimarer Republik, In : Rülcker, T. / Oelkers, J. (Hrsg.) : Politische Reformpädagogik, Bern / Berlin / Frankfurt a. M. / New York / Paris / Wien 1998, S. 632. これについては、小峰総一郎が『ベルリン新教育の研究』風間書房、2002年、390頁でいち早く紹介している。
 - * 2 「新教育」と「新教育運動」を区別すべきであるという提言と、それに沿った事例研究を示したものとして、拙論「新教育『運動』のリアリティー—新教育連盟とヴェーニガー—」、教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第14号、2005年（近刊）。
 - * 3 山名淳「新教育時代の教員養成論議—全国学校会議（1920年）における教員養成に関する議論を事例として—」、山崎洋子・宮本健市郎・山名淳・渡邊隆信『新教育運動期における「教職の専門分化」と「教育学の制度化」に関する比較的研究』平成14年度—平成16年度科学研究費補助金基盤研究（C）（1）、10—21頁を参照。
 - * 4 ベリング, R. （望田幸男他訳）『歴史のなかの教師たち—ドイツ教員社会史—』ミネルヴァ書房、1987年、119頁以下。
 - * 5 Kittel, H. : Die Entwicklung der Pädagogischen Hochschulen 1926-1932 ; Eine zeitgeschichtliche Studie über das Verhältnis von Staat und Kultur, Berlin / Hannover / Darmstadt 1957, S. 61.
 - * 6 Klafki, W. : Elisabeth Blochmann als Reformpädagogin in Halle, In : Röhrs, H. / Pehnke, A. (Hrsg.) : Die Reform des Bildungswesens im Ost-West Dialog ; Geschichte, Aufgaben, Probleme, Frankfurt a. M. / Berlin / Bern / New York / Wien 1994, 134f.
 - * 7 Kittel, H. (Hrsg.) : Die Pädagogischen Hochschulen ; Dokumente ihrer Entwicklung (I) 1920-1932, Darmstadt 1965, S. 78.
 - * 8 Kittel, H. (Hrsg.) : Die Pädagogischen Hochschulen, a. a. O. , S. 79. 佐藤史浩「プロイセンのPädagogische Akademieの成立過程について」、東北大学教育学部教育行政・学校管理・教育内容研究室『研究集録』第9巻、1978年を参照。
 - * 9 佐藤、前掲、藤枝静正「西ドイツにおける Pädagogische Hochschule 政策の展開」『埼玉大学紀要教育学部編』第20巻、1971年、村馬達雄・佐藤史浩「C. H. ベッカーと A. ライヒヴァイン—教育アカデミーの創設とその継承をめぐる—」、日

- 本教育学会編『教育学研究』第57巻第1号、1990年、山元有一「エドゥアルト・シュプランガーと教育アカデミー（前編）」、『松阪大学女子短期大学部論叢』第37号、1999年等を参照。
- *10 佐藤史浩「C. H. ベッカー研究（I）」、東北大学教育学部教育行政学・学校管理・教育内容研究室編『研究集録』第17号、1986年、50頁。リンガー, F. K. (西村稔訳)『読書人の没落—世紀末から第三帝国までのドイツ知識人—』名古屋大学出版会、1991年、45頁等を参照。
- *11 Schiller, J. : Der preußische Kultusminister C. H. Becker und die Reformpädagogik der Weimarer Republik, In : Pädagogik und Schulalltag, 46. Jg. , H. 3, 1991, S. 273.
- *12 Kittel, H. : Die Entwicklung der Pädagogischen Hochschulen 1926-1932, a. a. O. , S. 71. こうしたベッカーの後援者的な態度は、1932年の新教育連盟の第6回国際会議（ニース）への参加に際してドイツ支部を人的・経済的に支援した行為からも読みとることができる（拙論「新教育『運動』のリアリティ」前掲を参照）。
- *13 Kittel, H. : Die Entwicklung der Pädagogischen Hochschulen 1926-1932, a. a. O. , S. 74.
- *14 ditto, S. 75.
- *15 ditto.
- *16 ditto.
- *17 Becker, H. / Kluchert, G. : Die Bildung der Nation, Stuttgart 1993, S. 394.
- *18 アムルンク, U. (対馬達雄他訳)『反ナチ・抵抗の教育者—ライヒヴァイン1898—1944—』昭和堂、1996年、208頁。
- *19 同上書、212頁。
- *20 Schwenk, B. : Erich Weniger-Leben und Werk, In : Dahmer, I. / Klafki, I. (Hrsg) : Geisteswissenschaftliche Pädagogik am Ausgang ihrer Epoche-Erich Weniger, Weinheim 1968, S. 6 f. .
- *21 Hesse, A. : Die Professoren und Dozenten der preußischen Pädagogischen Akademien (1926-1933) und Hochschulen für Lehrerbildung (1933-1941), Weinheim 1995, S. 322f..
- *22 ditto, S. 288.
- *23 Flitner, W. : Gesammelte Schriften, Band 11, Erinnerungen 1889-1945, Paderborn / München / Wien / Zürich 1986, S. 328.
- *24 坂越正樹『ヘルマン・ノール教育学の研究—ドイツ改革教育運動からナチズムへの軌跡—』風間書房、2001年、17頁。
- *25 Ahrens, E. / Wedemeyer, I. / Weniger, E. : Bibliographie Herman Nohl, Weinheim

1954, S. 38ff. .

- *26 Flitner, W. : Gesammelte Schriften, Band 11, a. a. O. , S. 319.
- *27 坂越正樹『ヘルマン・ノール教育学の研究』前掲、33頁以下。
- *28 Blochman, E. : Herman Nohl in der pädagogischen Bewegung seiner Zeit 1979-1960, Göttingen 1969, S. 145ff. , Klika, D. : Herman Nohl ; Sein) Pädagogischer Bezug (in Theorie, Biographie und Handlungspraxis, Köln / Weimar / Wien 2000, S. 247ff. .
- *29 最初は「リップルツベルク友の会」(Lippoldsberger Freundeskreis) という名称であったが、すぐに改称した。会員宛の回状から推察すると、会員数は1929年当初は38名、1935年に52名を数えた (Klika, D. : Herman Nohl, a. a. O. , S. 248.)。
- *30 翌年の1930年3月になっても、邦議会でフレンスブルクへの変更について議論されたが、変更の提案は却下された。
- *31 N. N. : Akademiestadt Altona ; Feierliche Eröffnung der Pädagogischen Akademie in Altona, In : Altonaer Nachrichten, 15. 5. 1930.
- *32 ditto.
- *33 Weniger, E. : Theorie und Praxis in der Erziehung, In : Die Erziehung, 4. Jg. , 1929. この論文は、彼が1929年4月にキール教育アカデミーに教授として招聘されたときの主任講演をまとめたもので、雑誌『教育』に掲載された。後に主著『理論と実践における教育の独自性』(1953)の巻頭を飾ることになる論文でもある。
- *34 Flitner, W. : Gesammelte Schriften, Band11, a. a. O. , S. 339.
- *35 Becker an Weniger vom 14. 5. 1930 : SUBG Weniger 1 : 43. (「SUBG Weniger」はニーダー・ザクセン州立・ゲッティンゲン大学図書館所蔵ヴェーニガー遺稿の意味。以下同じ。)
- *36 Weniger an Flitner vom 30. 9. 1929 : SUBG Weniger 3 : 5, 34.
- *37 ditto.
- *38 ditto.
- *39 ditto.
- *40 Erlas vom Preußischen Minister für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung, 29. 10. 1929 : SUBG Weniger 5 : 16.
- *41 Erlas vom Preußischen Minister für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung, 11. 7. 1930 : SUBG Weniger 5 : 16.
- *42 Weniger an Gebhardt vom 13. 11. 1929 : SUBG Weniger 1 : 238.
- *43 Weniger an Nohl vom 5. 11. 1929 : SUBG Weniger 1 : 624.

*44 Hesse, A. : Die Professoren und Dozenten der preußischen Pädagogischen Akademien
(1926-1933) und Hochschulen für Lehrerbildung (1933-1941), a. a. O. , S. 818.

*45 ditto, S. 366f. .

Lehrerbildung und Reformpädagogische Bewegung in der Weimarer Republik

—Mit Bezugnahme auf die Pädagogische Akademie Altona—

Takanobu Watanabe

Wenn man nicht einzelne Theorien oder die Praxis der Reformpädagogik sondern die von derer Verbindung gestaltete "Bewegung" der Reformpädagogik verfolgt, hat das Netzwerk der Reformschulen und -pädagogen eine große Bedeutung. Nach H. Schmitt geschieht die Vernetzung einerseits über Personen, z.B. Schul- und Standortwechsel von Lehrern, Organisationen, Tagung und Kongresse u.s.w., und andererseits über Medien, z.B. regionale Lehrerzeitschriften, Tageszeitungen, überregionale pädagogische Zeitschriften u.s.w.. Ich stelle die These auf, dass die Lehrerbildung auch die Vernetzung der Reformpädagogik förderte.

In diesem Aufsatz gebe ich zunächst einen Überblick über die Gründung der Pädagogischen Akademien, indem ich die Reform des Ausbildungswesens der Volksschullehrer in der Weimarer Republik beschreibe. Danach erkläre ich die Bedeutung C.-H. Beckers, der initiativ bei der Gründung der Pädagogischen Akademien beteiligt war, für die Reformpädagogik. Anschließend behandle ich die Berufungen für die Pädagogischen Akademien mit Bezugnahme auf H. Nohl und seinen Kreis, der die führende Rolle in der damaligen akademischen Pädagogik spielte. Schließlich, nachdem ich die Gründung der Pädagogischen Akademie Altona und die Eigentümlichkeit der Berufungen für sie erkläre, weise ich darauf hin, dass Pädagogische Akademien eine besondere Beziehung zur Reformpädagogik hatten.